津軽地方の一代様信仰

石岡　彩華
（地域生活文化課 主事）

津軽地方では、生まれ年の十二支によって決まる、自身を一生守ってくれる神仏の信仰が盛んである。

この神仏は一代様と呼ばれている。子年は千手観音菩薩、丑寅年は虚空蔵菩薩、卯年は文殊菩薩、辰巳年は普賢菩薩、午年は勢至菩薩、未申年は大日如来、酉年は不動明王、戌亥年は阿弥陀如来、または八幡大菩薩であるとされている。特に中南津軽地方においては、それぞれの神仏は特定の寺社と結びついており、現在ではその寺社自体を一代様と認識している人々もかなり多い。

一代様信仰と結びついた寺社の一つである求聞寺。境内には牛と虎の像が置かれている＝2021(令和3)年11月2日・筆者撮影

津軽地方の人々は、正月、春先の農作業が始まる前などの一年の節目や、厄年、受験などの一生の節目に一代様を祀る寺社を訪れる傾向がある。体に不調が現われる、不運に見舞われるなど、日常でイレギュラーな出来事が発生したときに参詣する人も少なくない。

ただし、その参詣方法は個人ごとに多種多様である。例えば、一代様への初詣について津軽地方の人々に質問すると、「毎年正月には岩木山神社に行った後、家族全員の一代様を回る」、「家族の中で一番近い一代様のみ行く」、「毎年は行くのは大変だから、年男(年女)のときのみ参拝する」、「自分の一代様には行かないが、その年の十二支の一代様には行くことがある」というように、千差万別の答えが返ってくる。つまり、一代様信仰は個人が自分たちの都合に合わせて、カスタマイズできる信仰であるといえる。

ところで、このような信仰は津軽地方だけでなく、実は全国各地に点在していることはご存知だろうか。例えば、青森県から程遠い沖縄県那覇市においても類似する信仰が存在している。一代様は、全国的には「守り本尊」と呼ばれることが多く、東北地方東部ではケタイガミ、家来神などの名称も見られる。

この信仰が全国的に広がったきっかけとなったのが、大雑書と呼ばれる書物の流通である。大雑書とは、江戸時代から発行された陰陽道に基づいた暦や暦注、占いなどの知識が記された実用書である。

この書物には、守り本尊に係る記事が掲載されており、生まれ年の十二支ごとに守り本尊、前世と今世について、夫婦の縁、寿命などが記されていた。大雑書は全国的に流通していたため、それに掲載されていた守り本尊の知識も全国に広がり、津軽地方においては一代様信仰として発展した。

では、青森県ではいつごろからその知識が流入していたのだろうか。上北郡野辺地町の野坂家では、1856（安政3）年に書かれた「一代守記事」という古文書が伝来しており、他家が所有する大雑書から守り本尊に係る記事の一部を書き写したものである。

また、1860（万延元）年に一瓢舎半升によって著された『御国巡覧滑稽嘘尽戯(津軽道中譚)』では、黒森山にある寺院の弟子が主人公たちに占いをする際、守り本尊を割り出す場面が描かれている。これらのことから、少なくとも江戸時代後期には守り本尊の知識が流入していたと考えられる。

今年も残り数週で終わり、新年が始まる。来年の元旦も寒空の下、人々が列をなして一代様を祀る寺社へ参詣する光景が見られるだろう。読者の皆様もぜひ一度参詣してみてはいかがだろうか。